

「知っている」から「分かる」へ

春日中学校 三年 北 葉恩

暑さとは別のじわりとしたイヤな汗が背中に流れ落ちた。懐中電灯の灯りを消したことで辺り一面に広がる暗闇が私を心細くし、いつの間にか手を握りしめている。さっきまで反響するように聞こえていたガイドさんの声が遠ざかって…。何か見えないかと目をこらしていくと、あるはずのない包帯やうじ虫が見えるような気がしてくる。息苦しい。うまく呼吸ができない。ああ、もう無理だ！

足元もおぼつかない状態でガマから外へ出ると、さわやかな風がふき抜け、目の前に広がる沖縄の空はどこまでも青く澄んでいた。

私が修学旅行で訪れた沖縄は終戦から今年でちょうど八十年を迎えていた。平和祈念公園を訪れ、防空壕として使用されたガマ入壕体験…。それらを通して、本当の意味で戦争の恐ろしさ、悲惨さを分かっていたのかもしれないと感じた。

沖縄に到着して最初に訪れた平和祈念公園で亡くなった方の氏名が刻まれた「平和の礎」のその数に圧倒される。二十万を超える人がここ沖縄で命を落としていると話を聞いた時、その数があまりに大きすぎて実感がなかったのかもしれない。だが、こうして一人ずつの氏名を見つめていくと、その人が確かに生きていて、その一人ひとりに友だちや家族がいたという事実をつきつけられ、ただただ立ちすくむ。中には氏名が分からず〇〇の子といった表記の方もいたが、それでもそこに刻まれているということで生きた証となっている。名前をずっと見ていくと、いつの間にか自分が見られているような気がしてきた。どうして？何が違う？生まれた時代？生まれた場所？…私の名前がそこにはたまたま戦争をしていない平成の日本に生まれたからだ。逆に何か一つ違ったら、そう戦争がなかったら、二十万をこすこの名前の持ち主たちは、石碑に名前を刻むことなく今日この日を生きていたかもしれない。そのことに気が付いてしまうと、私はもう石碑を見ることが出来なくなった。…涙がにじむ。うまく言葉にできない気持ちや感情が入り交じる。罪悪感？生きている喜び？崩れ落ちてしまいそうな、叫び出したいような今までに感じたことのない何かがそこにあった。

そうして話は冒頭に戻る。ガマ入壕体験を私は生涯忘れることはないだろう。

戦争が本当にあったのだ、たくさんの命がそこで失われたのだということを、これほど身に染みて感じたことは今までなかった。恥ずかしながら私は、沖縄で体験してやっと本当の意味で戦争の悲惨さ、奪われた多くの尊い命、ないがしろにされた人権を理解できたのだ。だからあの日から平和学習における自分の中の受け止め方、感じ方が以前とは違う。史実を越えて自分の現実として捉えるこ

とができるようになったことで、人権学習における平和教育について考えてみる。

「死ぬための薬が入ったビンを首から下げて生活していたんですよ。いつでも死ねるように。」

の言葉は、戦争でどう生きるかではなく、どう死ぬかと考えている様子がよく分かる。それは、人権がない。全く、ひとかけらさえ。全ての人が生まれながらに持っている権利が戦争では何一つ尊重されないのだ。なぜなら人権は人間が人間らしく生きる権利で、決して死ぬことしか選択肢が与えられない状況に存在しないから。戦争と人権は相反するものといっている。二度と戦争をしないこと、それが戦争で亡くなった人たちに私たちがしなくてはならない大きな約束だ。

私たちが戦争をしないため、人権を守るために出来ることはなんだろう。私がいるのは、親がいて、その親がいて戦争という人権のない社会も懸命に生き抜いた先祖の人たちがいたからだ。自分が誰かのつないでくれた命だと感じると、自分を大切にしようと思う。自分の命を、気持ちや考えを大事にする。つないでくれた人に感謝を伝える。思っていることを声に出しても非国民だと言われることはないのだから。それから、周りの人の命も大切にしたい。私もそうであるように生きている一人ひとりが誰かのつないでくれた命だ。そう考えると、当たり前の日常が何にも変えられないかけがえのない瞬間の積み重ねだ。ここにいること、今日生きていること、それだけで素晴らしい。つかれたら空を見上げる。あのどこまでも澄んだ沖縄の青を思い出して。